

## 〈恥と名誉——夫婦の真実〉

ジャーナリスト  
松本 侑壬子

米アーサー・ミラーの戯曲「セールスマンの死」を演じるイランの俳優夫婦の話である。今年（二〇一七年）の米アカデミー賞（外国映画部門）を受賞したが、監督と主演女優が、トランプ大統領による特定七カ国からの入国制限命令に抗議して授賞式出席をボイコットしたことで注目を浴びた作品だ。

テヘランの小劇団員である高校教師エマッドと妻ラナの住むアパートが、隣の敷地の強引な建設工事のために倒壊の危険にさらされる。公演を前に突然住む家を失った夫婦は、急遽避難先として仲間の紹介による賃貸物件に入居する。先の住人の私物がまだ大量に残っていたが、大事な本番を前にやむを得ない。ともあれ引越しを済ませ、無事に舞台初日を迎えた。そして、その夜、事件は起こった。夫より一足早く帰宅したラナが、正体不明の侵入者に襲われたのだ。いったい、誰が？

夫が妻の運ばれた病院へ駆けつける。と、浴室で倒れていたラナを救い出してくれた隣人が、「犯人は元住人の女の客ではないか」という。女は何人もの男を部屋に連れ込んでハッパしだらな商売を続けていたのだという。

エマッドは自宅のソファの上に犯人の遺した鍵束と携帯電話を見つけ、その持ち主を突き止めると、ラナに警察に訴えようと言う。だが、ラナは事件を表沙汰にすることを頑なに拒み、舞台をそのまま続けたいという。

愛する妻への凌辱は自分への凌辱であり、犯人を罰し、名誉を取り戻さなくてはならないとする夫の言い分と、事件のショックから立ち直れず、ついに舞台で芝居を続けられなくなる妻の苦しみ。自分が被害者であるにもかかわらず、事件を恥じ、世間に顔向けできないと思ってしまう気持ちから逃れられないのだ。

穏やかで、睦まじく知的な若い夫婦の気持ちはずれて、生じた亀裂が次第に深まってゆく。エマッドは、犯人と対決すると腹を据えて、鍵の持ち主である場所に誘い出す。だが、そこへやって来たのは、まったく思いがけない人物だった…。

よく考え、練られた脚本が秀逸。次に何が起こるかまったく予断を許さないが、会話も描写も実に自然でリアル。

日頃、報道では政治か経済、はたまた戦争関連のニュースばかり目につくイラン。そして、女性に課される負荷は確かに（日本同様）軽くはなさそう。しかし、そうした日常の中の夫婦、家族、隣人らの微妙な気持ちの交わり方は、何と素直に見る側の心に響いてくることだろう。いい、悪いではなく、そこではこのように人々は、女性は、生きているのだという実感である。監督自身、「人間関係、特に家族関係の複雑さを描いた」と言っている。

時代の激しい変動を背景に、ミラー原作の夫婦、テヘランの舞台上の夫婦、そして現実生活の夫婦の姿が、混乱なくくつきりと描かれ、これに見る側が我がごとと重ねて見る味わい深さ。俳優も素晴らしい。それも結局、監督の腕ということなのだろう。



### 『セールスマン』

イラン・フランス合作映画 (124分)

監督：アスガー・ファルハディ

出演：シャハブ・ホセイニ、タラネ・アリドゥスティほか

6月10日(土)より、Bunkamura ル・シネマほか  
全国順次ロードショー

© MEMENTOFILMS PRODUCTION-ASGHAR FARHADI PRODUCTION-ARTE  
FRANCE CINEMA 2016